麻帆良に輝く光さす道

Ｊ・フロスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
麻帆良に輝く光さす道

【Ｎコード】
Ｎ５５３６Ｚ

【作者名】
Ｊ・フロスト

【あらすじ】
不動遊星は平和な時を過ごしていたが、ある事件がきっかけで麻帆良学園にとばされてしまう。その世界では、魔法が存在するという世界だった。
遊星は３－Ａの副担任となり、ネオドミノシティに帰る方法を探すが……
チーム５Ｄ，ｓ、ネギ・スプリングフィールド、３－Ａ生徒たちはこの世界を舞台に闇の力との戦いが始まっていく……
＊この小説は遊戯王５Ｄ，ｓと魔法先生ネギま！！のクロスオーバ

ー小説です、
不定期更新、駄文ですが見ていってください。

第1話　謎の旧モーメント襲撃者（前書き）

ネオドミノシティ編です
誤字・脱字等の指摘でもいいので、感想待っています。
少し遊戯王５Ｄ，ｓの設定をぶち壊しているかもしれません。

第1話　謎の旧モーメント襲撃者

視点　遊星

俺たちがイリアステルから……
Ｚ（ゾーン）ＯＮＥとのネオドミノシティを守るための決闘（デュエル）から数日
平和な時をネオドミノシティは過ごしている。

シティは元の姿を取り戻しつつあり、さらに発展しようとしている。
俺たちはＷＲＧＰ（ワールドライディングデュエルグランプリ）で優勝したが
それに甘んじず、Ｄ－ホイールの改造とＺＯＮＥ（ゾーン）たちの世界
……破滅の未来を避けるための方法を考えている。

チーム５Ｄ（ファイブディーズ）’ｓのメンバーもそれぞれの日常に戻り
今を進み、未来への道を進んでいる。

俺は今日もＤ－ホイールの改造にいそしんでいるが……

「うむ！　やはりピリ辛レッドデーモンズヌードルは最高だ！！」

ジャック……　最近カップヌードルをたべすぎじゃないか？まぁ、
いいか。
もう昼か、俺も今日の昼食はカップラーメンにしよう
ずっとこの平和が続いていけばいいんだがな……

ｔｒｕｕｕｕｕｕｕｕｕ……　ｔｒｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ……

ん？　電話か、誰からだ？

「遊星、俺が出る。
ちょうどカップラーメンを食べ終えたところだからな」

「ああ、任せたジャック、もしネオドミノシティを救った英雄を取材したいとかだったら断ってくれ」

目立つのはあまり好きじゃないからな。

「まかせておけ、…もしもし？…ん？　なんだ、牛尾か、何？
遊星！！　Ｄ－ホイールの牛尾との通信を入れろ！！
セキュリティからだ、何か厄介なことが起こったらしい」

『牛尾が？　ああ、わかった」

Ｄ－ホイールの牛尾との通信回線をＯＮにする。
何の用なんだろうか……

「ん？　おお！！　つながった！
またＤ－ホイールの改造でもしていたのか？
まったくよぉ、いつもお前は……」

「牛尾、それでいったい何の用なんだ？
わざわざ電話までしてきたんだ。
それなりに重大な頼みごとなんじゃないのか？」

「ああ、そうなんだ
一つ聞くが……　そっちはお前とジャックだけしかいねぇのか？」

「そうだが……　クロウかアキに用があったのか？
クロウは今、配達に行っているし

平日の昼間だから、アキは今、デュエル・アカデミアで授業だと思うが……」

牛尾……なぜそんな深刻そうな顔をしている？

「いや、それなら後でお前から連絡を入れてほしい、できればシグナー全員、龍亞と龍可ちゃんにも頼む
もしかしたら……　いや、おそらくダークシグナーが復活したかもしれない」

牛尾のその言葉に俺とジャックは言葉を失った、ジャックはその後D－ホイールをたたきながら叫んだ。

「どういうことなのだ！！　牛尾！！　今きさまはどこにいる！！」

ジャックの言うとおりだ！　どういうことなんだ！
ダークシグナーが復活したというのなら一大事じゃないか！！

「今そいつは旧モーメント内部にいるんだが……
何が目的なのか、何のつもりのか、まったくわからない。
襲撃を受けてこっちも被害を受けているんだ……　こっちにきてくれないか？」

「ああ、わかった、できるだけ早く行くから待ってろ！！」

そう言い、俺は牛尾との通信を切る。

「ジャック！　行くぞ！　旧モーメントへ！！」

「言われるまでもないわ！　決闘盤（デュエルディスク）だ！

受け取れ！　遊星！」

ジャックから決闘盤（デュエルディスク）を投げ渡され、Ｄーホイールにセットする。
ジャックも決闘盤（デュエルディスク）をＤーホイールにセットした。
ダークシグナー復活したとしたら、この町を破壊なんてさせやしない！
そう胸に思い、俺はＤーホイールを旧モーメントに向けて走らせた。

……さて、クロウと連絡をとるか…
アキ達デュエル・アカデミア組は連絡が取れないだろうだろうからな。
クロウのＤホールと連絡っと

「…ん？　遊星じゃねえか！？　どうしたんだ？
こっちは配達が早く終わったからそっちに戻ってメシにしようとお

もってたのによぉ」

「クロウ、今どこらへんを走っている？」
「どこらへんって言われてもなぁ…
そうだな、デュエル・アカデミアの近くって言えば分かりやすいか？
…そういや今日は、午前授業だって昨日龍亞が言ってたような……
アキ達を乗せてそっちに向かおうか？
連絡とってくるってことは何か厄介な事でも起きたんだろ？」

「ならクロウ！！　アキ達を連れて旧モーメントに向かってくれ！！」

「旧モーメントぉ？
なんでまた？」

「さっき牛尾から連絡があってな…
ダークシグナーらしき奴に旧モーメントが襲撃されたらしい」

「なんだってぇ！？
大変じゃねぇか！？　もしまたゼロ・リバースなんか起こされたら……！」

「ああ、そんなことになったらやっとイリアステルから守った俺たちの町が破滅へと向かう
たからなんとしてでも阻止しなければならない！！
俺とジャックは先に旧モーメントに向かう！！」

「わかったぜ遊星、だが……死ぬんじゃねえぞ！？」

「大丈夫だ」

そう言い、俺はクロウとの通信を切った。
さて、もうすぐ旧モーメントか……
全速力でとばしたからか、思ったよりも早く着いたな……

旧モーメントに着いたのはいいが……
……ひどいな、これは。

「うう…」「痛えよぉ…」

「セキュリティの奴らの負傷者が多いな……
牛尾の奴は大丈夫なのか…　少し心配になってきたな
まぁ、連絡をしているだけ、無事だと思うが」

確かに……　ここには負傷者が集められているのか？
テント等で治療を受けている。
見たところ負傷者は１０人から１５人ぐらいいるようだが
ん？　あのテントから見えるのは…

「遊星、来たか、ちょっとこっちに来てくれ」

あのテントから見えたのは…　牛尾か、こっちに向けて手をこまね
いている
どうやらあのテントの中で話をしようとのことらしい。

「来てくれてすなないな、遊星、ジャック、協力感謝する」

「ふん、何をいまさら言うのだ」　「俺たちにまかせてくれ」

「すまねえ…現状をせつめいする
お前たちと連絡を取る前に実は血の気が多い奴らが命令を無視して
襲撃者を拘束するために強行突破をしかけたんだよ
しかし……結果はさっき見たような状況になっちまってな、あれは
俺の責任だ
だが俺は部下たちを助けるときにになな、顔を見ちゃあいねえんだが
そいつのすがたはみたんだよ」

「どういう奴らだったのだ？」

「いや、おそらく単独犯だろう、監視カメラには一人しか映ってい
なかったからな、
そいつは……黒いフード付きの服を着てて、ところどころに紫色の
のラインがあった。

……そしてきわめつけに、右手のに何のだかはわからなかったが紫色に光る痣みてぇなのがあった」

そいつはほぼダークシグナーだな、確定とはいかないが…

そもそも、何が目的で襲撃なんかをしたんだ？

「ふん！　そこまでわかれば十分だ！

地縛神やダークシグナーがなぜまた復活したのかは知らん！！

だがこのジャック・アトラスが全てこの力によって粉砕してくれるわ！！

行くぞ、遊星」

確かに地縛神やダークシグナーは俺たちシグナーがすべて倒し、

地縛神は封印されたか消滅でもしたはずだ……

……まさかとは思うが、スカーレッド・ノヴァのような生き残りのようなやつがいたのか？

考えているうちにジャックはテントから出て行こうとする。

「まぁ、待てジャック、まだ話は終わってねえ

それで負傷者ができたりした訳なんだが…

デュエルモンスターズのカードが実体化し、俺達を襲ったと怯えた様子で俺に話した奴がいるんだ、ここまで言えばわかるだろ？」

「相手は……サイコデュエリストということなのか？」

ジャックの足が止まり、牛尾に問いかけた

しかし…カードの実体化とは…

「ああ、おそらくそうだ
あいつの怯えようからして嘘は言ってねえ
あれだけの負傷者ができちまったっていうのも、一つの証拠だ
それにこの旧モーメントはセキュリティの保護下にあって
厳重な警備で守っていたっていうのに、……それがたやすく蹴散らされてる
もしそうだとしたなら、かなり強力な奴だろうな」

牛尾がジャックの問いかけに答える
サイコデュエリストか…厄介だな
……アキ達が来るのを待つか？

「遊星！！　きさまもいつまで黙ったままでいる！！
わけのわからぬ奴がまたゼロ・リバースを引き起こすのかもしれんのだぞ！！
きさまはそれでもいいのか！」

ジャックが俺のむなぐらをつかみ、語りかける
……たしかにジャックの言うとおり今すぐに行動するのも一理ある
それならば……
俺はジャックの手を払いのけた。

「そうだな、行くぞ、ジャック、旧モーメントに
牛尾、クロウ達が来たら俺たち二人は先に行ったと伝えといてくれないか？」

「…わかったよ遊星、すまねえな
俺たちセキュリティは役立たずだ……」

「そんなことはないさ、俺たちは俺たちで、

牛尾たちは牛尾たちでこの町のためにやれることを一つずつやっていくだけさ」

牛尾にそう言いテントから出ると、Dーホイールに乗り俺たちは旧モーメントに向けて走り出した。

第1話　謎の旧モーメント襲撃者（後書き）

他の作者様の小説を見て自分も書きたいと思いましたが……
自分の文才のなさに驚きますね
すごいなぁ、１００００文字だとか一話に入れてる人とか、
俺にはそんなの無理だって思い知りましたよ。

ネギま！！世界へはあと2～3話ぐらいで行きます。

第2話　復讐のサイコデュエリスト！！（前書き）

第2話です。
地縛神だとかに独自設定を組み込みすぎですかね？

第2話　復讐のサイコデュエリスト！！

視点　クロウ

…さて、デュエル・アカデミアに着いたか…
アキ、龍亞、龍可を探さなねぇとな
しかし、人気がなさすぎる。

…ひょっとしてもうみんな家にかえっちまってるのか？
だぁーー！！　めんどくせぇ！！
いそがなきゃならねってのによ！！

「あら、クロウ、もしかしてデュエル・アカデミアに何か届け物？」
後ろから声をかけられ、振り返ると
探していた張本人チーム５Ｄ（ファイブディーズ），ｓメンバー、龍亞、龍可、そしてＤーホイールに乗っている十六夜アキがいた。

「クロウ、みんなもうとっくに下校しちゃってるし、校舎内にもう先生はいないはずだし、もう来たところで遅いと思うよ？」

「そんなんだったらなんで私たちは今さら校舎から出てきているのよ……
確か誰かさんが教室にデッキを置き忘れたからじゃなかったっけ？
戻る為にわざわざアキさんのＤーホイールにも乗せてもらってるっていうのに……」

「う……
そ、それは……」

「ふふっ」

ったく、龍亞は相変わらず龍可には頭が上がらないねぇなぁ
ってなごんでる余裕なんて無かったんだった！

「アキ！！　龍可！　龍亞！んな事より大変なんだ！さっき遊星から連絡が来たんだが
ダークシグナー復活したかも入れないかもしれないって言うんだ！！」

「「ええっ！！」」　「どういうことなのクロウ！！」

「どういうことってのは俺が聞きてえぐらいなんだよ！
ともかく龍亞！俺のブラックバードに乗れ！
アキは龍可を乗せてついてきてくれ！
走りながら説明する！」

そう言い俺は今ハイウェイを経由しながら旧モーメントを目指してDーホイールを走らせている。

「……ってなわけでよ
旧モーメントに遊星とジャックは先に行ったんだ」

そして説明を終えたが
三人とも不安そうな表情でいる
……無理もねえか

「ねえ、クロウ、アキさん
私、いやな予感がするの

襲われた場所だって旧モーメントなんでしょ？
だったらなおさら……」

「……私も龍可に同じくいやな予感がするわ
遊星たち……大丈夫なのかしら」

いやな予感か……
正直いって、俺もそんな感じがする
赤き龍の痣が伝えてくれてんのか？

「そういうときこそ
仲間を、絆を信じるべきだって遊星はいうじゃないか！
なーに、俺だって新しくシグナーになったんだ！
ダークシグナーなんて楽勝だって！」

遊星なら……か
確かにそういいそうだな……なら！

「アキ、もっとスピードを上げるぜ、早く旧モーメントに行きてえ
ついてこれそうか？」

「たぶん、大丈夫よ」

そう言い、俺はブラックバードのスピードを上げた。

――――旧モーメント――――
視点　遊星

もう旧モーメントの光がみえる
ここまでジャックとともに来たが……静かすぎる
襲撃者の姿もまだ見ていない。

旧モーメントが目と鼻の先のところまできてしまった
Dーホイールを止め降りるが……

「だれもいないではないか！
襲撃者はどこだ！！」

確かに……
外にはセキュリティがいるから見つかったら連絡が来るはずだ
逃げたというのはないと思うが……

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

拍手のような音が俺たちが入ってきたほうから聞こえたので
俺とジャックは振り返る。

視線の先にはダークシグナーの着ていた服と全く同じデザインの服
を着ている
だが、フードのせいで顔がよくわからない。

「きさまか！！　この旧モーメントを襲った奴というのは！」

「その通りだよ
ようこそ、不動遊星
そして……　はじめましてだね、ジャック・アトラス」

なぜだ…？
俺はこの声を聞いたことがあるような気がする
そして……　ジャックにだけはじめましてということは
俺とは会ったことがあるのか？

「きさまぁ！！　いったい何者だ！！
そのフードをとり、顔をこちらに見せろ！！」

「やれやれ、まだ私だとわかっていないようだね、不動遊星
ならいいだろう、ご期待に答えて
フードをとってやろうじゃないか」

謎の襲撃者がフードをとる
！！　奴は！！

「私の名はディヴァイン
今は無きアルカディアムーヴメントの総帥さ」

くっ！　奴が襲撃者だったのか！
だが、奴は……
それにダークシグナーとしてよみがえったにしても
目の白目の部分が黒くなっていない！
いったいどうなっている！！

「お前はたしか地縛神Ｃｃａｒａｙｈｕａ（コカライア）に飲み込まれ

死んだんじゃ……」

「確かに飲み込まれたさ、そして今ここにいる…
だが死んだというのはよしてほしいね、私は私だ
それに飲み込まれたからといって、死んだのではないさ
そうだな……　取り込まれた、というのが正しいのかな？」

「遊星！！　アルカディアムーヴメントというのはたしか十六夜がいたところだったな
ということは奴は…」

「ああ、奴はサイコデュエリストだ……
それも強力な方に入る、奴ならばセキュリティをあしらうこともおそらくできるだろう
だが奴は…　それに、地縛神は消滅したはずだ」

「まだ奴らは消滅したのではなく
君たちシグナーへの復讐を果たすその時のために、力を奴らはたくわえているのだよ」

っ！！だとしても納得できない！
シグナーとダークシグナーの戦いは５０００年周期だったはずだ！

「二人とも、納得できていないご様子だ……語ってやるとしよう
確かに私は地縛神Ｃｃａｒａｙｈｕａ（コカライア）に飲み込まれた…
そして、地縛神と共に私の肉体・魂は封印されてしまったが…
私の世界への、君たちへの憎しみ、怒り、復讐心があの地縛神に力を与えたのさ
それに、世界で何か大きな出来事が起きたのではないかな？
人々の心が欲望、悲しみ、絶望といったマイナスのエネルギーを大

いに
この世界に蔓延させた……
そのような出来事が起きているんだ
闇の存在たる地縛神に復活の機会を与えてしまっていたのさ」
大きな出来事とは……アーククレイドルの落下の事件か！
「まぁ、一時的だったようだが…
さまざまな幸運が重なり、私はよみがえったのさ
だが……一番の幸運は、地縛神がまだ弱っていたということかな？」
「どういう意味だ！！ディヴァイン！」
「簡単なことさ、私の心は、地縛神を超えたのさ
取り込まれていたが、奴の力はすべて私のものとなった！
つまり私は、神の力を手に入れたということさ、
この力によって自らの目的を果たす時が来た！」
すさまじい闇の力が心にまで伝わってくる！
だが……ここは逃げるわけにはいかない！
赤き龍の痣が輝く……俺に力を貸してくれている！
「決闘（デュエル）だ！ディヴァイン！！
俺たちがきさまの野望を阻止する！！」
「その通りだ！
さっきから聞いていれば神の力を手に入れただと？
人であるということを捨てたようなものではないか！！
人であるからこそ、前へと進めるのだ！
このジャック・アトラスがそれを証明してくれる！！」

俺もジャックも決闘盤（デュエルディスク）を構え準備する、
奴だけには、負けるわけにはいかない！！

「ほう？
この究極ともいうべき力を手にした私と決闘（デュエル）し、勝とうというのか
２対１か、面白い……と、言いたいところだが私もこの地縛神の力を
十二分に引き出せるわけではないのでね……
それに……Ｔｉｍｅ　ｏｖｅｒだ」

「何だと、それはどういう……」

ドカァァァァァァァァァン！！！！！！！

「旧モーメントが……爆破されただと！？」

「はっはっはっは！！
これで旧モーメントは暴走し再びゼロ・リバースのような大災害が
起こる
私としたことが……心が躍るよ」

こ、こんなことをしたら……

「正気かきさま！！
きさまもこの暴走に巻き込まれ、真に消滅するかもしれぬのだぞ！
！」

「かまわないさ、
私に怒りと憎しみを抱かせたこの世界と君たちに復讐さえできれば
他の人間が死のうが、そのような事どうでもいい」

どうでもいいだと？
こいつ……！！

「この旧モーメントの暴走は止められん！！
このネオドミノシティを！！　世界を！！　すべての人類を！！
すべて破壊！！　破壊するのだ！！
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！」

「ぬぅ……きさまぁ！！」

「くっ……旧モーメントの暴走は何が何でもくい止めてみせる！！

俺はコントロールパネルへと走る
エネルギーの逆流を止め、旧モーメントの起動を止めることができれば
まだ希望はある！！

「おっと、何をやろうとしているのか分らんが
好きにはさせせん！！
喰らえ！！魔法カード'ファイヤー・ボール'！！」

「何！！うわあああああ！！！」
三つの火球が俺を襲い、大きな音とともに爆発したが
煙がものすごく立ち込めているだけで、俺には傷一つついていない
……何故だ？　ともかく強引にでも旧モーメントを止める！！
……よし、これで、どうだ！！

キュウウウウウン

今の音はおそらく強制的に停止することに成功したか！？

煙が晴れていく……

ジャックの姿が見えたがどうも様子がおかしい。

「…ぐっ、遊…星…

きさま…無事…か？」

よく見るとジャックの身体から数本の煙が立ち、足はふらついており

手からは赤い液体が……

ジャック……お前まさか！！

「ジャック！！お前さっきのファイヤー・ボールを俺の身代わりに

なって受けたのか！？」

くっ！！　ジャック……すまない！！

「旧モーメントが……停止している！？

おのれぇ、不動遊星！！

やはりきさまは私にとって邪魔な存在だ！！」

ディヴァインは新たなカードを取りだし攻撃の準備をするが……

このままではまずい！

ジャックも負傷しているし

いつまでも避けられるわけじゃない！

「死ね！！　不動遊星！！

魔法カード…」

ウィィィィン！！！！！

音に気付き振り返るが……！！
旧モーメントが、また起動している！？
それと同時に赤き龍の痣も共鳴するように輝いている……
これは一体！？
旧モーメントのなのか、赤き龍の痣のなのかは分からないが
光が俺とジャック、ディヴァインを包みこむように輝き、
その眩しさに俺は目を閉じた。

第2話　復讐のサイコデュエリスト！！（後書き）

次話はネギま！世界にいきます。
感想待ってます。

第3話　見知らぬ世界とバトルモード（前書き）

今日中に執筆出来た！！
ああ～～ストックがなくなる

今回の話の内容はいろいろと詰め込んでいる気がするので、あとがきにツッコミを入れられそうな部分に解説をいれておきます。

第3話　見知らぬ世界とバトルモード

視点　遊星

俺が目を開けると、周りは黒一面しかない世界にいた。
ジャックもディヴァインすらもいない。

寂しさや、空しさ、悲しみといった
負の感情がことごとく心に流れ込んできている感じがする
ここは…闇の世界なんだろうか？　それとも……

しかし……俺はなぜこんなところにいるんだ？
あのまま旧モーメントは暴走し、町は破滅へ向かったんだろうか…
そして俺は……死んだ？
ここが闇の世界ではなく死後の世界だとしたら……少し寂しいな。

周りを見回したところで何もない。
そんな世界だからな……ここは

そして、赤き龍の痣が、再び強く輝きだし、目を閉じる。
目を開けると……木がうっそうと生い茂っている森にいた。

冷たい風と雲一つない空に月が輝いている。
そして一番目に付くのがあの巨大な木だな、少し遠いが、ここから
でもかなり巨大だということがわかる。
あんなものは見たことがない……ネオドミノシティのモニュメント
よりもでかいんじゃないのか？

それはともかく、俺はこんな場所を知らない。

さて、どうしたものか……

俺が今持っているものは、右手にあるこの決闘盤（デュエルディスク）とセットしているデッキぐらいしかない。

ここがどこだかまったくわからない、少し歩いて情報をあつめるほかないな。

仲間たちも同じような状況にあっているんだろうか…

だったらジャックが一番心配だな、あの性格だし、なによりも重傷を負っている。

……すぐ近くに、俺のDーホイールが倒れている状態であった。

俺と一緒にこの近くに転移したのか？

ともかく足となる手段を手に入れるのはとてもラッキーだ。

Dーホイールを起動させるが……

いつもよりもかなり調子が悪い、スピードも最高速度の４分の１ぐらいしか出ない程度だ。

おそらく原因はモーメントエンジンの回転率だろう

モーメントという言葉で気づいたが、決闘盤（デュエルディスク）のモーメントの調子も悪い

ソリットビジョンにはさしつかえが無いとは思うが……

さて……Dーホイールのナビでここがどこだかわかるかな？

わずかに期待したが、画面に表示されたのは

『現在地・不明』だった、強い風が笑っているかのように吹く
仕方ない、風任せに進むとするか。

まだ森を脱出できないか……ん？
森の奥が少し騒がしいな……
！！　あれは！！

「神鳴流奥義……斬岩剣！！」

1人の制服を着た黒髪の少女が刀を持って2体の悪魔と戦っていた、
しかし……あの悪魔を俺は知っている。
正確には、悪魔族モンスターなんだが。

1体は両腕がランスになっていて、鎧と兜を身に着けているモンスター、ランサー・デーモン
もう1体は胴体の部分が口のようになっており、その部分に頭蓋骨がある
赤毛の悪魔……マッド・デーモン
どちらもデュエルモンスターズのカードのモンスターだ
しかし……実体化している！！

なぜモンスターが実体化しているんだ？あれもディヴァインの仕業

なんだろうか……
ともかく、2対1だ、押されているようだから、あのままではあの少女は殺されてしまうだろう、助けないとな。
俺はDーホイールの今出せる全力のスピードでマッド・デーモンに体当たりをした。
マッド・デーモンは木にたたきつけられ、動かない
……これは交通事故に近いんじゃないのか？
そう思うと、少しマッド・デーモンに罪悪感が出てくるな。

「大丈夫か？」

「あなたは何者ですか？」

「とりあえず、味方さ、さがっていろ」

ランサー・デーモンがうろたえているような動きをしている……
おそらくマッド・デーモンが突然やられたので驚いているんだろう。
いったんさっきの黒髪の少女を乗せて逃げるという手段もあったが……不安だ。
いつ急停止したりするかもわからないからな。
それに相手はランサー・デーモン……ならば！
決闘盤（デュエルディスク）を右手にセットし、デッキに手をかけるが……
突然俺のドラゴンヘッドの痣が輝き、その光を決闘盤（デュエルディスク）とデッキがそれを吸収するような形となった。
…どういうことだ？

【決闘盤（デュエルディスク）、バトルモードに移行、起動します】

なっ！？　バトルモードだと！？

！？　俺の体が勝手に動く！？　痣の力か！？
俺の意思とは全く関係なく5枚のカードをドローすると、デッキの一番上のカードがドローしやすいようにか、少し飛び出ている。
……こんな機能なんて俺はつけた覚え全くないぞ！？

勝手に俺の左手がカードをドローすると、1枚のモンスターカードを召喚するように決闘盤（デュエルディスク）に置いた。
すると、白い装甲つけ呼吸器のようなものをつけた戦士……
スピード・ウォリアーが現れた。
しかしこのスピード・ウォリアー…実体化している？
俺はサイコデュエリストじゃないんだが……　まさかさっきの光によってか！？

スピード・ウォリアーは身体から青い闘志みたいなものを出すと、素早くランサー・デーモンに近づくと
開脚蹴り……ソニック・エッジをくらわせ、ランサー・デーモンを消滅させた。

しかし、先ほどおれがDーホイールで体当たりしたマッド・デーモンがいつからか目を覚ましており
後ろからスピード・ウォリアーを殴り、消滅させた。
ぐっ……！？　スピード・ウォリアーが破壊されるのと同時に俺に衝撃が伝わってきただと！？

……まずいな、さっきの体当たりで怒り狂っている、マッド・デーモンはこちらを睨みつけているからな。
すると、俺に向けて胴体にある頭蓋骨をかみ砕き、それをこちらに飛ばしてきたじゃないか！！
だが、俺の手は1枚のカードをセットし、それを発動させていた。

目の前にくず鉄で出来た案山子が現れ、マッド・デーモンの攻撃を防いでいる……
これはくず鉄のかかしを発動させているのか……

しかし……罠カードは伏せたターンには普通使えないはずなんだが……
まぁ、使えているんだから気にしないでおこう。デッキの一番上のカードがまた少し飛び出たのでドローすると、身体が自由に動けるようになった。
後は自分自身で戦え…　そう言いたいんだな？　ドラゴンヘッド……
ともかく、俺は先ほどドローしたカードを召喚した。

「こい！　ジャンク・シンクロン！
そして、その能力によってよみがえれ！　スピード・ウォリアー！」

ジャンク・シンクロンが手をかざすと不思議な穴のようなところからスピード・ウォリアーが飛び出した。
そして守備の体制をとる……ここらへんは決闘（デュエル）と同じか……
なら……アイツを出すか

「スピード・ウォリアーに、ジャンク・シンクロンをチューニング！！」

ジャンク・ウォリアーをシンクロ召喚し、一気に叩く！
ジャンク・シンクロンが身体についているエンジンを引き、３つの輪となりスピード・ウォリアーを包みこみ、ジャンク・ウォリアーとなったが……
元の素材２体に分かれてしまっただと！？
このバトルモードというのでは、シンクロモンスターは出すことができないのか！？

うろたえていると、マッド・デーモンがスピード・ウォリアーを攻撃し、破壊された。
くっ……先ほどまでとはいかないが少しきついな……
だが、守備表示ならダメージは軽減できるということか……
……しまった、くず鉄のかかしを使っておくべきだった…
シンクロができなかったからか、少し焦ったな

「なら…ジャンク・シンクロン！
マッド・デーモンに攻撃しろ！　ジャンク・スプラッシュ！！」

ジャンク・シンクロンが号令のようなことをすると、どこからともなくボルトの雨がマッド・デーモンを襲い、破壊した。

やったか……
安心感からか、俺は両膝を地面につけ、倒れる。
なんだか目の前がグニャグニャするような感じがする……
そういえば昼も食べていなかったな…
俺は安心感と空腹、そしてダメージによる疲労でその場に倒れた。

視点　黒髪の少女

っ！！　まだ身体にダメージが残ってる……
さすがに5体も相手にしたのはきつかった……龍宮を呼ばずに一人

で向かったのは失敗のようですね…
まぁ、3体は切り捨てたんですが。

しかし……さっきの人は大丈夫なんだろうか？
さがってろと言ったので一旦退いておいたのはいいんですが……

あの5体は私がいままで相手をしていった鬼だとかとは違う。
そう、あれは……悪魔

あの魔法先生はそんなの相手にしたことあるんでしょうか？
木乃香お嬢様以外の魔法関係者だったら別にいいんですけどね。

けど……まぁ、助けてもらったわけですし……
……助ける方法は少しアレでしたが。
戻ってみますか

そういえば……あんな人魔法先生の中にいたっけ？
あまり交流を持たないのも少し問題かもしれませんね。

戻ってみましたが…
オレンジ色のキャップを被ったこびとのようなのが号令をかけるかのように天を指さしていていた。

「なら…ジャンク・シンクロン！
マッド・デーモンに攻撃しろ！　ジャンク・スプラッシュ！！」

その言葉の後、ねじがいっぱい赤い悪魔に向けて降っていった！？
そして悪魔を消滅させてる……

「うっ……」

って！倒れた！？　さっきの変な小人みたいなのも消滅していく…
え～と、とりあえず誰かを呼ばないと…
ふと、私は右手につけられている機械についている1枚の物
いや、カードに気が付いた。

「ジャンク・シンクロン？？」

そのカードには、さっきの変な小人みたいのが描かれていた。
これらを使役させて戦っていたのかな？
召喚術はどちらかというと西が使うもの
と、いうことはこの人は西が麻帆良学園によこした人？
襲撃したりするならわざわざ私を助ける意味はないはず
ならこの人はいったい……？？

私にはわかりかねますね、高畑先生を呼んで学園長の指示を仰ぎましょう
とりあえず式神を呼んでおけば場所はわからなくならないし、監視にもなる。
まずはそれからとしましょう。

第3話　見知らぬ世界とバトルモード（後書き）

黒髪の少女は神鳴流の時点でわかるとお思いですが桜咲刹那です。
桜咲が切り捨てた3体の悪魔？
それについては気にされると俺が困ります、というか桜咲がマッド・デーモンとランサー・デーモン相手に苦戦するというのが想像しづらいというのも一つの原因ですが。

シンクロ召喚が出来ない理由としては
シンクロにはモーメントの力が必要という独自設定が俺の中であります
赤き龍の力によって遊星の決闘盤のモーメントがわずかながらに動いているという考えになっているんです。
だからシンクロができない……という感じでお願いします

ジャンク・シンクロンの攻撃？
漫画版５Ｄ，ｓ　第二話を見てください。
ちなみに攻撃力だけでバトルに勝つというのはこの作品では捨ててくれるとうれしいです。
貫通能力はほぼ無意味です、そのモンスターが受けたダメージが軽減されてコントローラーに伝わるというものなので……

設定＋バトルモード解説（前書き）

サブタイトル通り、設定です
追加されて増えるかもしれません

設定＋バトルモード解説

・バトルモード

赤き龍の力によって遊星たちの決闘盤（デュエルディスク）が進化したもの

モンスターを実体化させることができ、それを行使させることが出来る。

モンスターが受けたダメージはある程度軽減され、コントロールしているプレイヤーに伝わる

カード効果は一部変更されているものもあり、ＯＣＧ効果、アニメ効果になっていたりするものもある。

罠カードは伏せた瞬間から発動することができる。

（くず鉄のかかしの効果によっての再セットは次のドローまで使えない）

守備表示モンスターが破壊された場合のダメージは攻撃表示時よりも小さい

・バトルシステム

ドローしてから次のドローするまで（次のドロー準備までは約２分とする）を１ターンとする

１ターン内にモンスターは１体しか通常召喚出来ない

ライフポイント＝精神力とする

守備表示モンスターが破壊される場合、攻撃表示時よりもコントローラーへのダメージは軽減される

貫通能力はこのバトル方式では関係ないものとする

シンクロ召喚はモーメントの力を十二分に使い、行えるものとしているので遊星一人ではシンクロ召喚することは出来ない。

赤き龍の力によって、モーメントはその回転率を上げる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5536z/

麻帆良に輝く光さす道

2011年12月21日00時59分発行